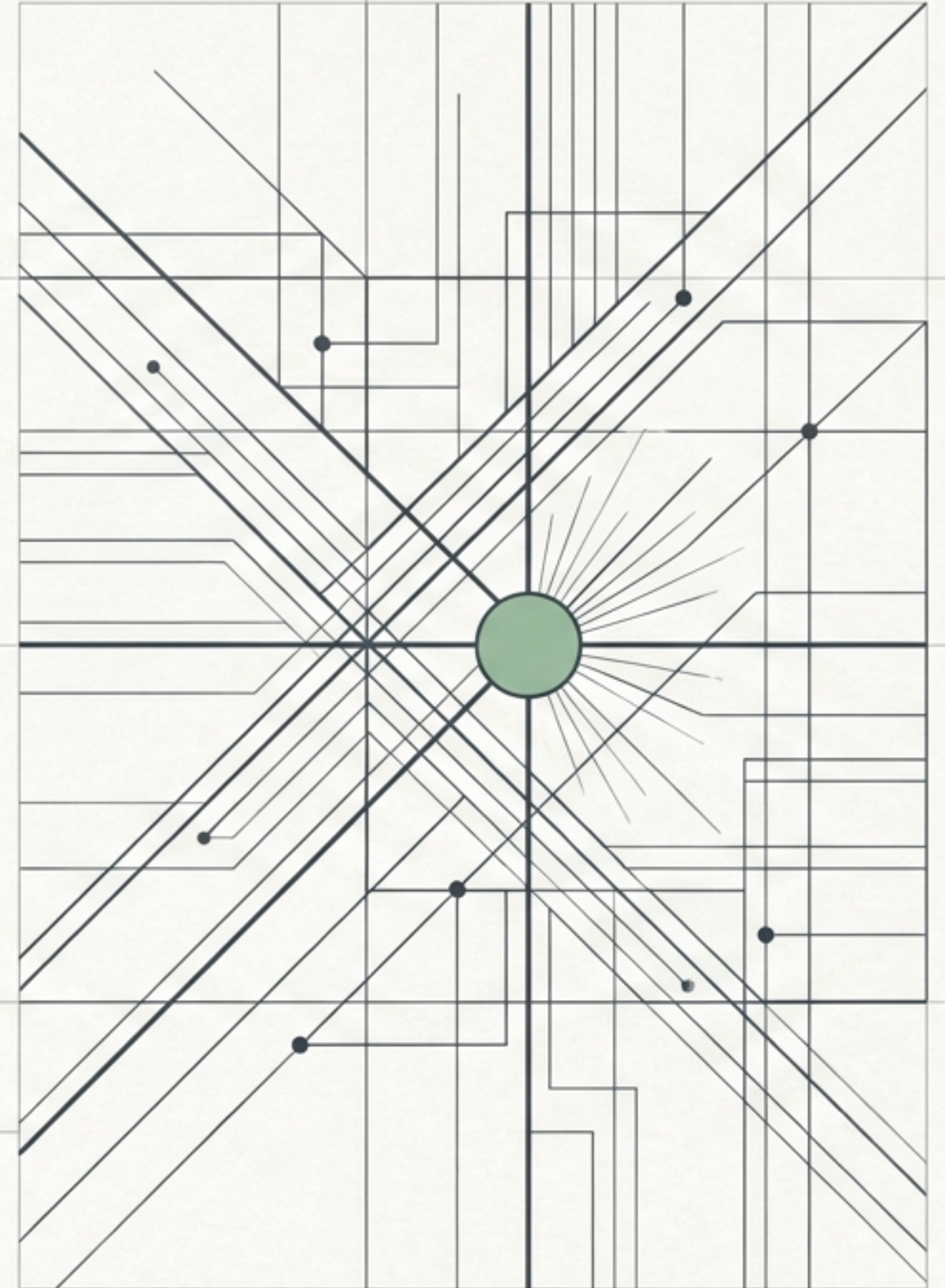


# 民主的対話の アーキテクチャ再設計

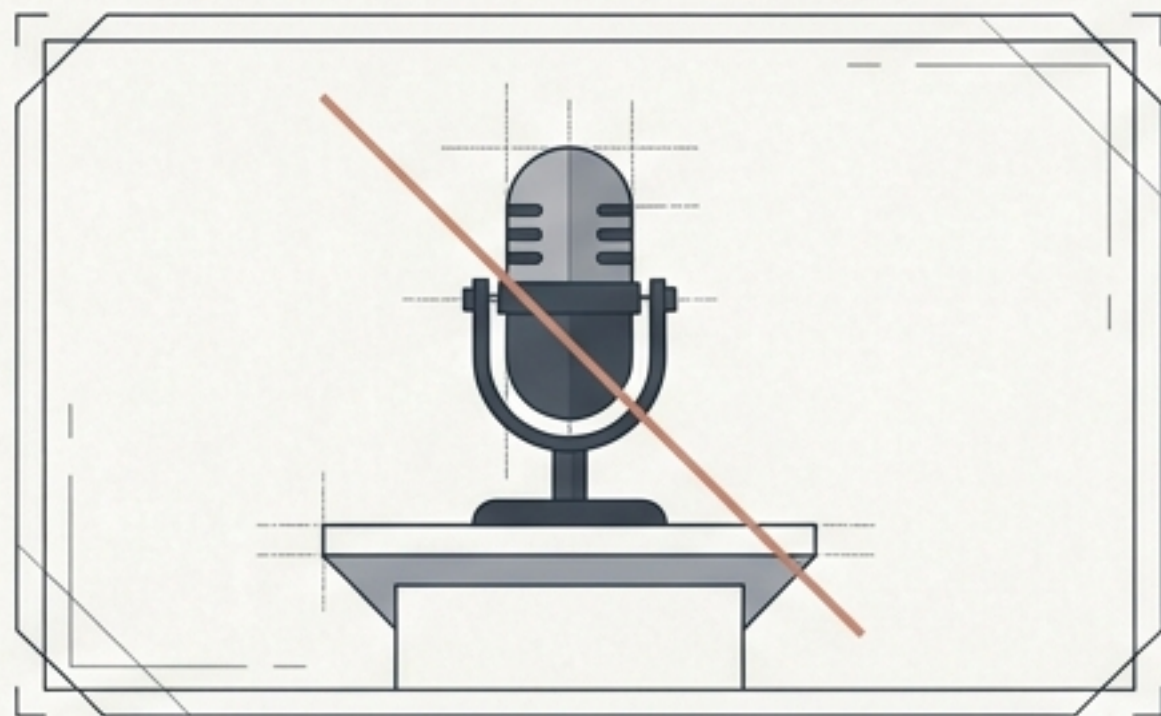
アテンション・エコノミーの罠から  
「オムニクラシー」の集合知へ

ポスト階層的アプローチに基づく意思決定プロトコルの設計図



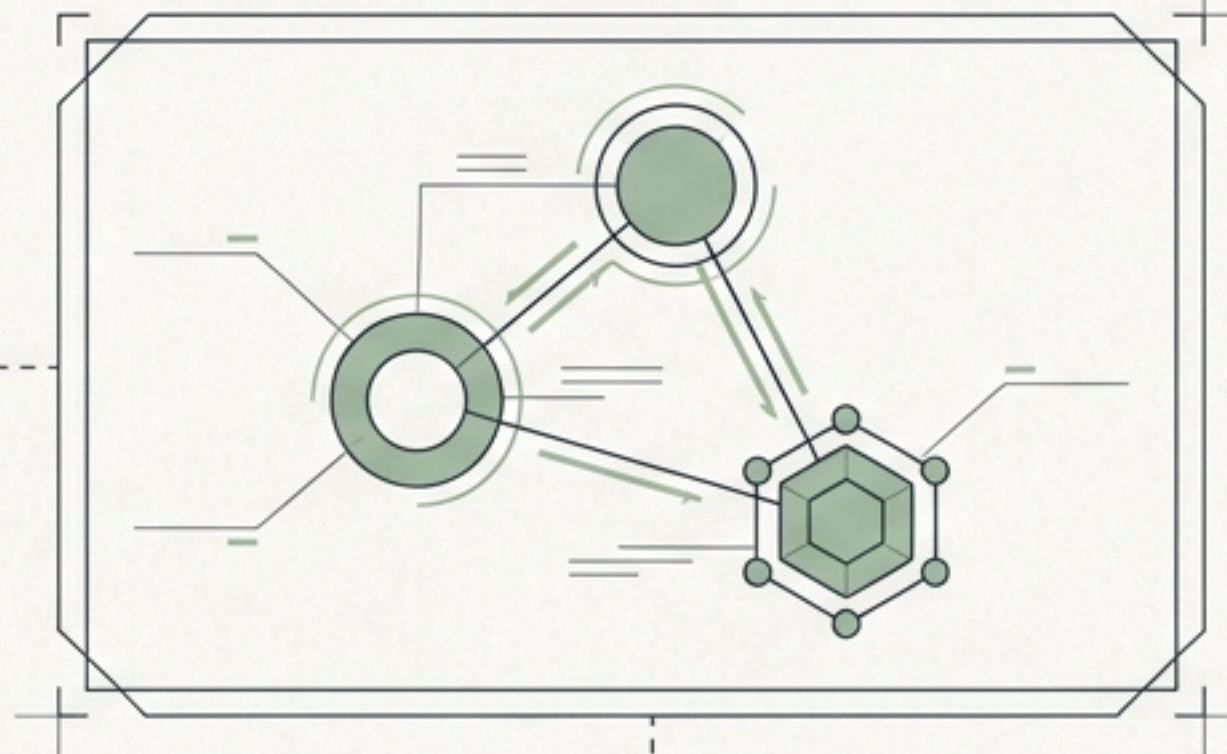
# 問題は「モラル」ではなく「システム」である

哲学者パウリウス・グリテナスが警告するように、民主的なコミュニケーション規範は崩壊しつつあります。しかし、単に「礼儀正しさ」を求めるだけでは不十分です。



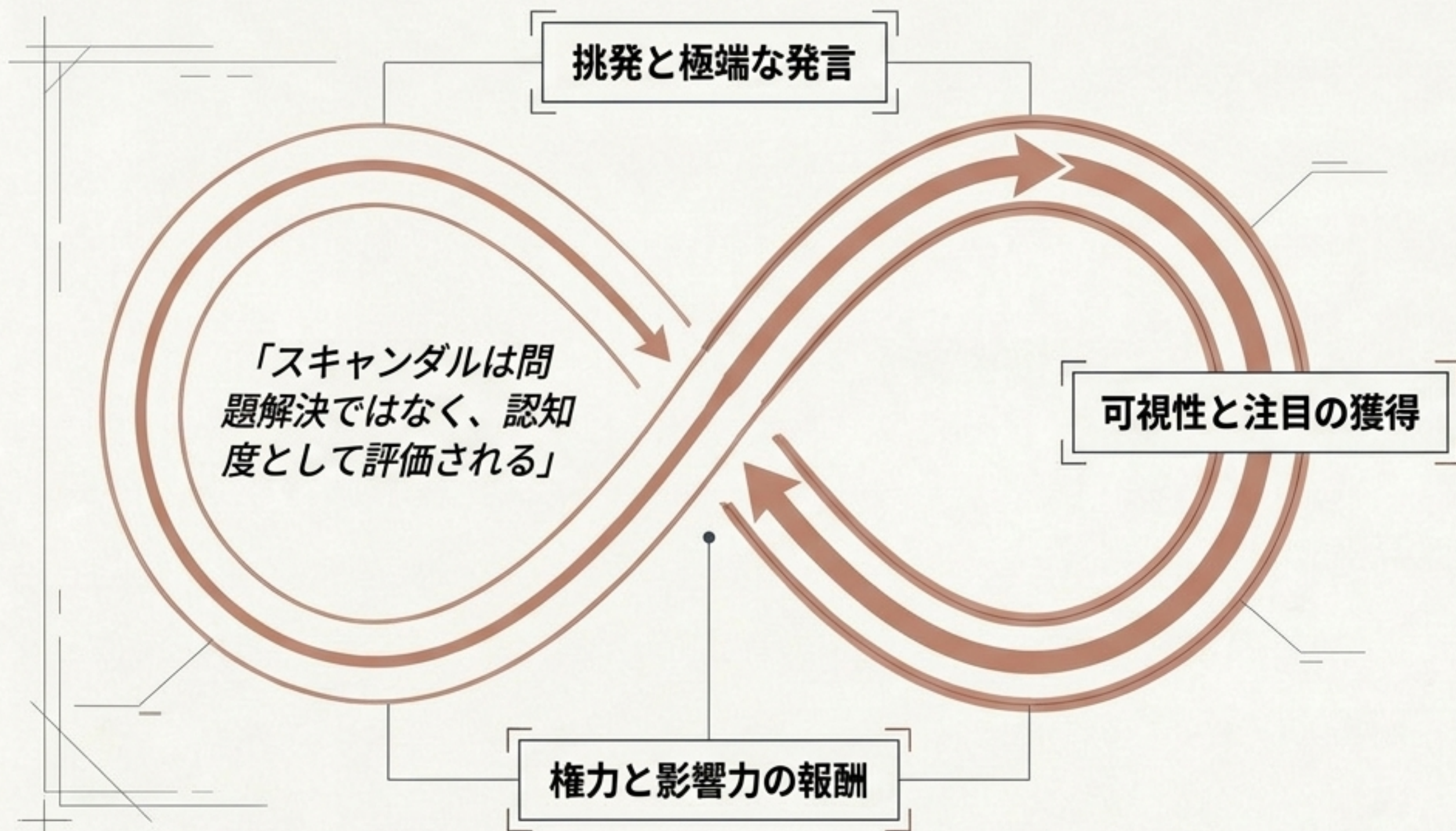
**現在の矛盾:** 民主主義の「開かれた性質」が、信頼を破壊するインセンティブを保護してしまっている。

**事実:** 挑発が報われる環境（注目を集め、認知度を高める環境）では、個人の誠実さはシステムのインセンティブと衝突します。



モラルを説くのではなく、ゲームのルール（システム）自体を書き換える必要があります。

# アテンション・エコノミーの悪循環



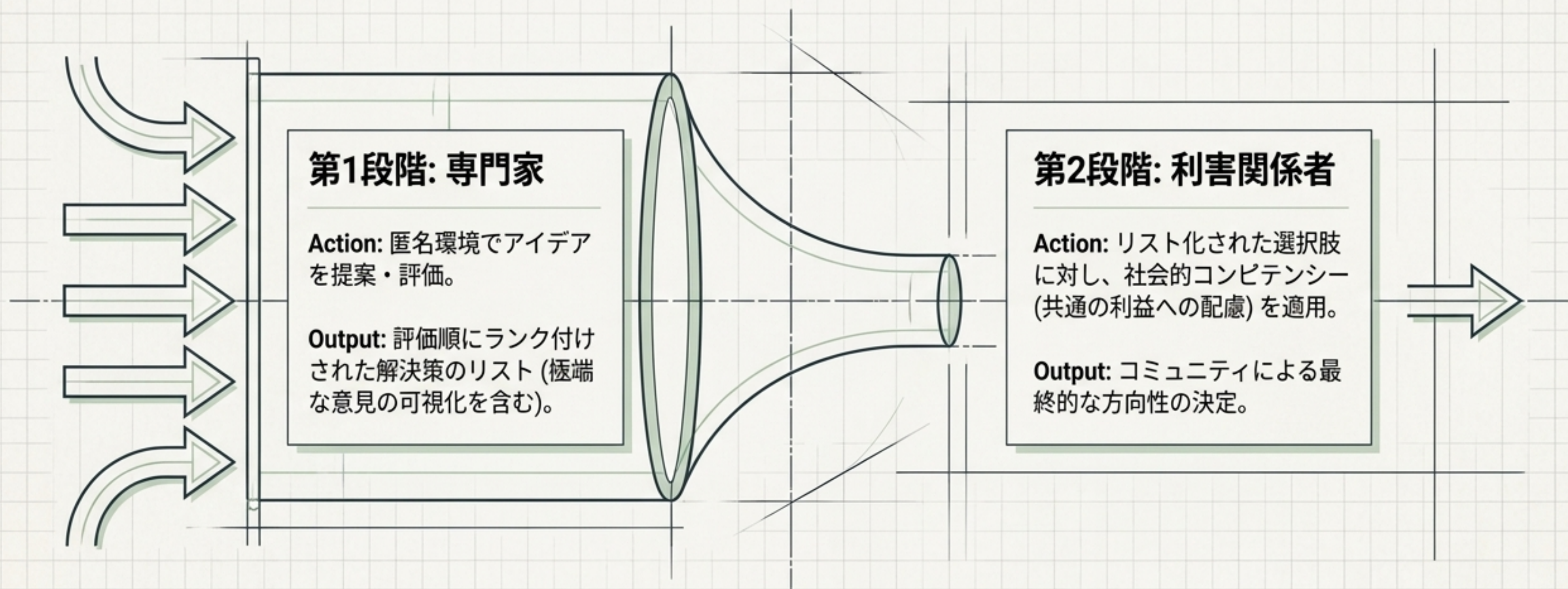
**階層構造の再生産:** 一部の人々が決定権を巡って争い、残り的人々は単なる「観客」に留まるシステム。

**結論:** このサイクル内では、システムを「治療」することは不可能。全く別の次元での協働が必要。

# パラダイムシフト：注目から「ディサイドメント」へ

|                        | アテンション・エコノミー        | オムニクラシー (Omnocracy)        |
|------------------------|---------------------|----------------------------|
| 目的<br>(Goal)           | 注目を集め、議論に勝つこと       | 具体的な課題に対する新しい解決策を見つけること    |
| メカニズム<br>(Mechanism)   | 討論と対立 (勝者と敗者)       | 匿名でのアイデア創出と相互評価 (ディサイドメント) |
| 意思決定<br>(Selection)    | 代わりに決定を下す「代表者」を選出する | 利害関係者自身が直接、解決策を選択する        |
| インセンティブ<br>(Incentive) | 挑発的な発言が報われる         | 公平で責任ある評価が報われる             |

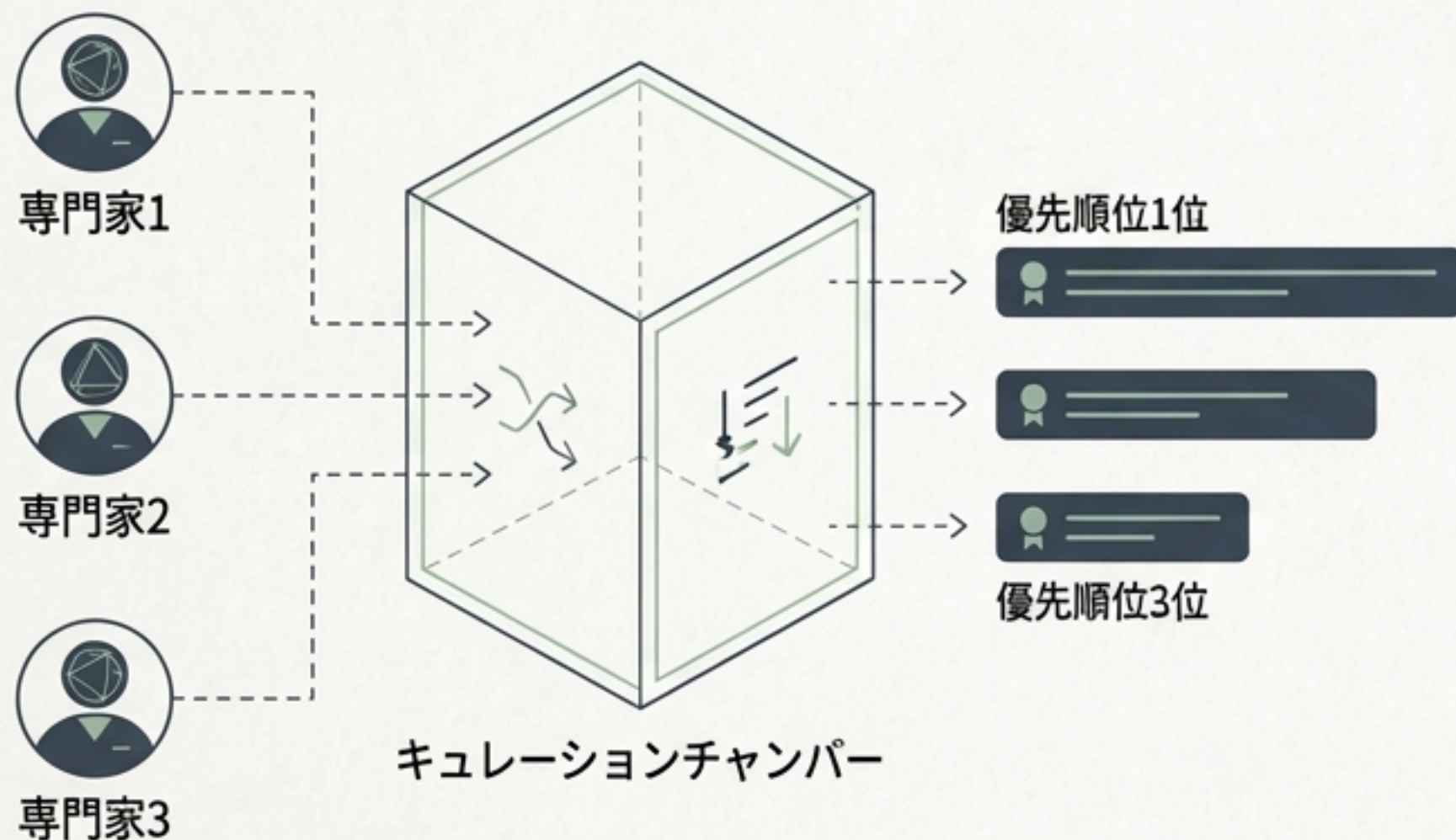
# オムニクラシー（Omnicracy）の2段階プロトコル



プロトコルがインセンティブを設計し、人間がアイデアを評価し、アルゴリズムがスコアを集計する。

# 第1段階：専門家による解決策の創出

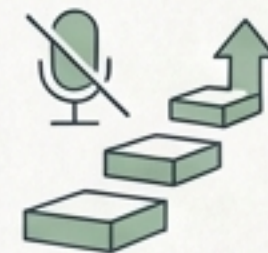
## 匿名インプット環境



## 重要原則



**匿名のインテリジェンス:** 権威や同調圧力の排除。誰が言ったかではなく、何を言ったかが評価される。



**討論ゼロのルール:** 相手を打ち負かす必要はない。他者のアイデアは、自らのより良い代替案を生み出すための踏み台となる。



**参加の資格:** 委任や選考委員会ではなく、タスクに応じた専門性（AIによる知識テストと過去の実績ウェイト）で参加が決定される。

集合知は、個別の意見を単に寄せ集めたものではない。明確なタスクの下で、相互に評価し合うインタラクティブなグループから生まれる。

# ペナルティ・ボックス：「ゼロ」の法則

新しいアイデアを提案する前に、必ず他者の提案を評価しなければなりません。これにより重複を防ぎます。



**[+1 to +5]:** 同意。問題解決に貢献するアイデア。

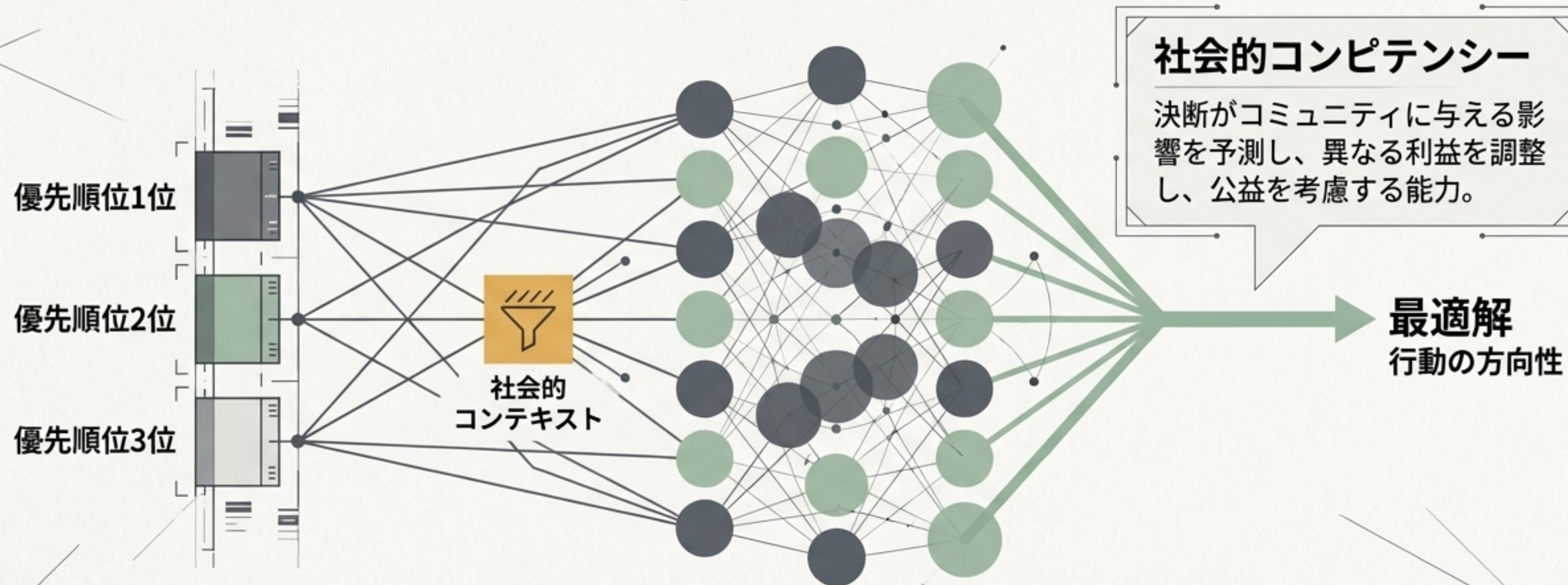
**[-1 to -5]:** 意見の相違。

**[0]:** 重複・陳腐・タスクからの逸脱に対するペナルティ。

ゼロ点は「不人気な意見」への罰ではありません。他者の意見を読まずに同じことを繰り返す行為、または複数のアイデアを 1 つに混ぜる行為に対する「システムのペナルティ」です。

# 第2段階：利害関係者による最終決定

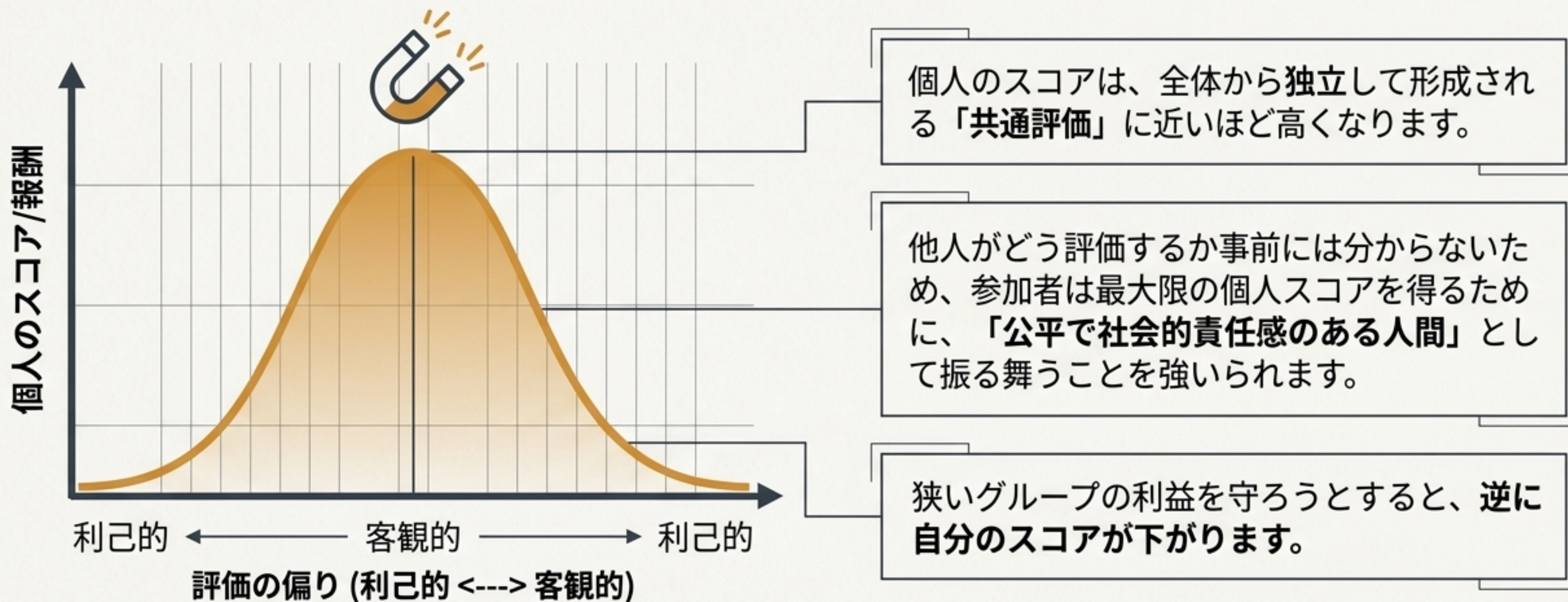
第1段階で整理された選択肢から、実際に影響を受ける人々（利害関係者）が最終的な解決策を選択します。これはアンケートや代表者選挙ではありません。



専門知識（第1段階）が「可能な選択肢」を明らかにし、当事者の参加（第2段階）が「行動の方向性」を決定する。

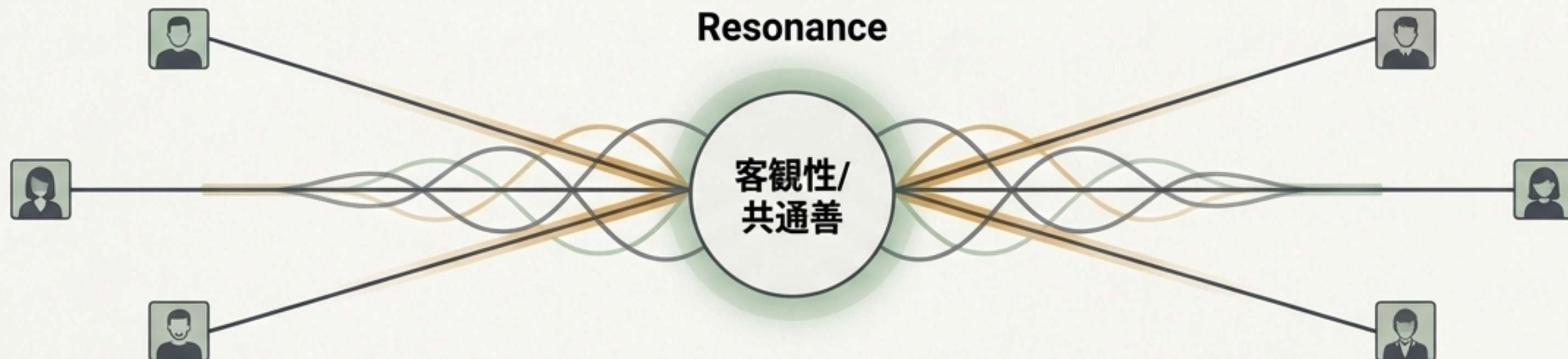
# 逆囚人のジレンマ：インセンティブの再設計

アテンション・エコノミーでは、利己的な追求が全体を悪化させます（古典的な囚人のジレンマ）。ディサイドメントはこれを反転させます。



# アルゴリズム化されたカントの定言命法

「あなたの判断の原則が、普遍的な法則となるかのように評価せよ」 — イマヌエル・カントの哲学に基づく類推



## Column 1

多数派に迎合することは不可能です  
(他者の評価が隠されているため)。

## Column 2

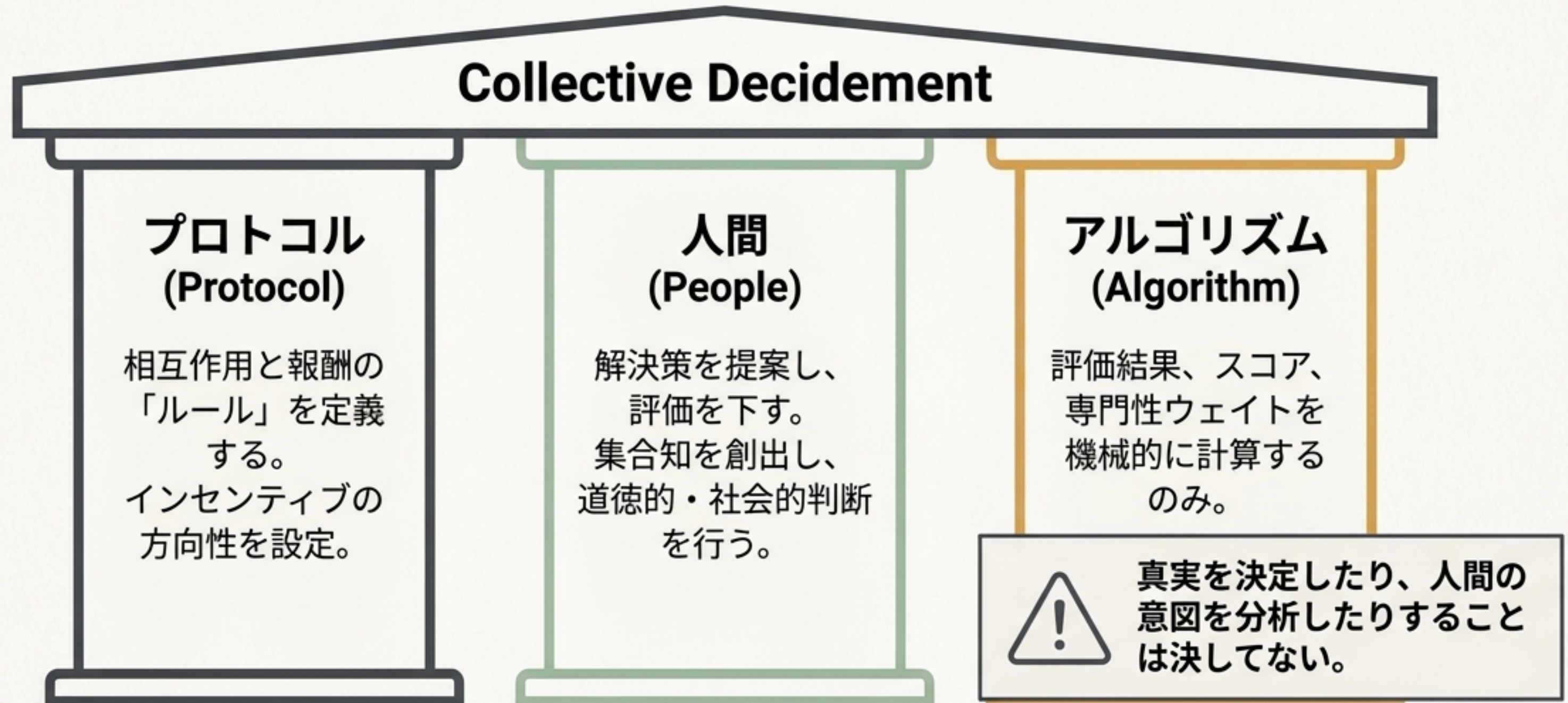
匿名性が権威や同調圧力を排除しま  
す。

## Column 3

結果として生じる合意は、多数派の意見  
の単なる「再現」ではなく、独立した評価  
が共鳴し合う「レゾナンス (共鳴)」です。

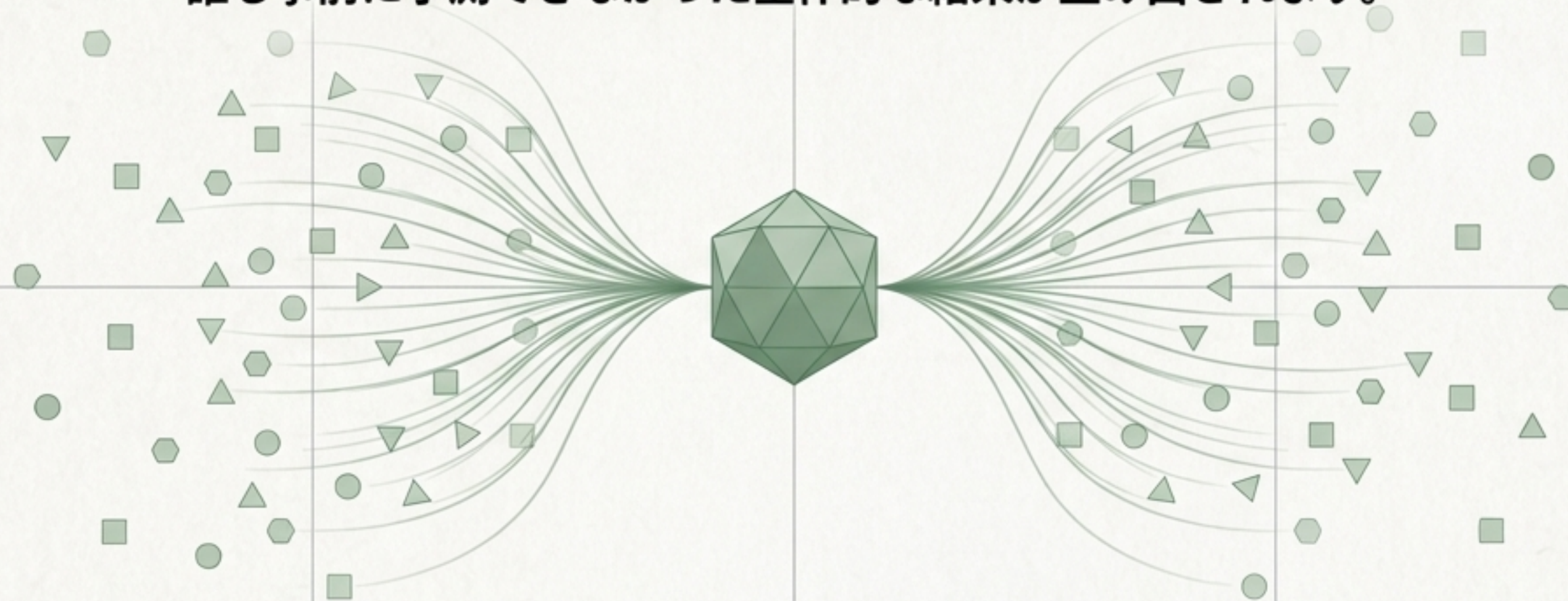
これにより、狭い利益の影響が弱まり、参加者の「間主観性」が「客観性」へと昇華されます。  
これにより、狭い利益の影響が弱まり、参加者の「間主観性」が「客観性」へと昇華されます。  
予測市場とは異なり、評価は解決策を探るプロセスそのものから生まれます。

# 三位一体のエンジン：誰が決定を下すのか？



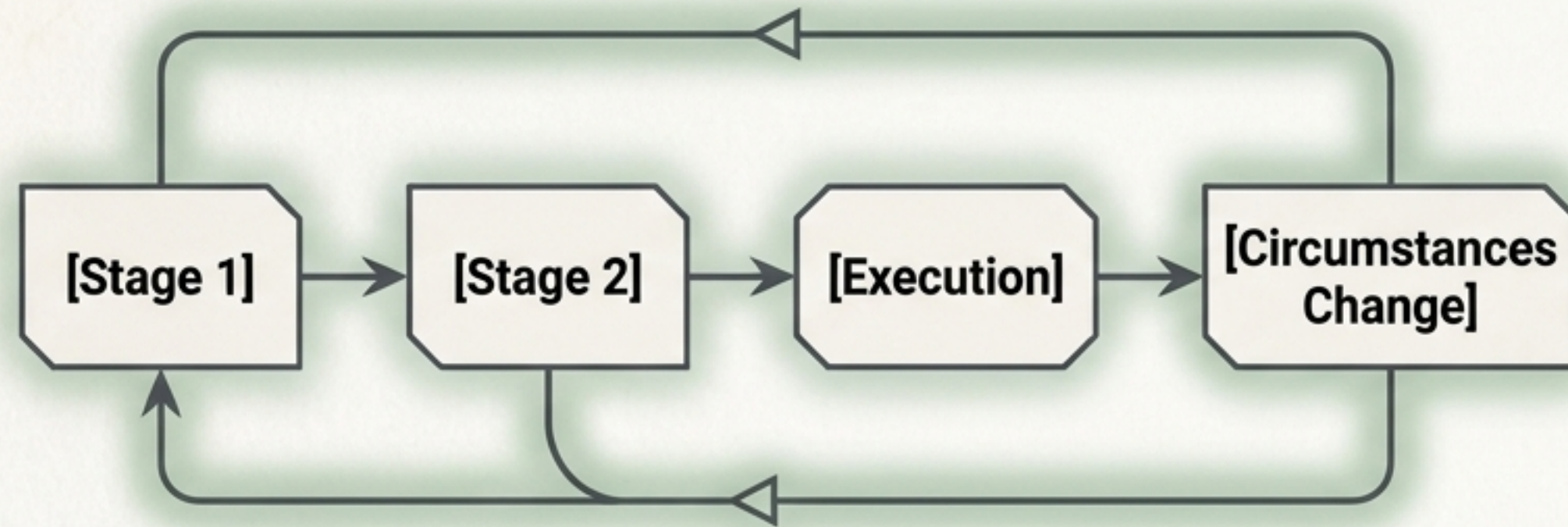
# 集合知は設定されるものではなく、創発するものである

「正解」のリストが事前に用意されているわけではありません。  
すべての参加者が公平に評価しようと努めることで、  
誰も事前に予測できなかった全体的な結果が生み出されます。



民主的な対話の危機を救うのは、政治家への倫理的要請ではありません。  
注目を争うゲームを終わらせ、「個人の成功が公益と結びつく」ゲームを再設計することです。  
私たちはより良い人間を求めるのではなく、より良いアーキテクチャを構築する必要があります。

# 適応するアーキテクチャ：今日から実装可能な未来



最良の解決策は永遠ではありません。  
状況が変化すれば、人々の発意によって再び2段階のプロセスが再始動します。  
社会は決定の結果から学び、行動能力を維持したまま変化に適応します。

国家体制の変革を待つ必要はありません。  
企業、地域コミュニティ、ネットワーク組織において、今すぐオムニクラシーは適用可能です。

代表者に決定権を委ねるのではなく、専門知識に基づき代替案を探り、共同で選択する時代へ。

実践例とインフラは  
METACON プロジェクトカタログ  
および omnicracy.net にて展開中。